文化

ディドロの現代性

没後200年を迎えて　中川　久定

抑圧された価値復権

江戸時代の日本　系統的に紹介

日本ではほとんど知られてないが…

十八世紀フランスが生み出した巨大な思想家・文学者であり、かつ本巻十七巻、図巻十七巻におよぶ『百科全書』の編集者でもあったドニ・ディドロが七十歳でその生涯を閉じてから、ことしでちょうど二百年になる。だが、彼の友人で、あの有名なジャン＝ジャック・ルソーに比べて、このディドロという名前は、日本ではほとんど知られていないというのが実情ではあるまいか。

けれども、ディドロの祖国フランスではもちろん事情が異なる。書店にはディドロの著書（全集版、文庫本）、ディドロに関する研究書、および雑誌、週刊誌の特集号が氾濫（はんらん）し、いたるところに彼の肖像ポスターが張り出され、セーヌ左岸の川岸に面した造幣局の正門前には、展覧会の大きな幟（のぼり）がはためき、記念はがき・記念メダルが売り出され……といったありさまである。

フランス文化省は、本年度におけるディドロ関係諸行事のプログラムを発行しているが、ほぼ五十ページに及ぶこの小冊子には、音楽会、展覧会、芝居、講演会、学会等の記事がぎっしりとつまっている。

このパンフレットが示しているように、学会が開催されるのは、フランス国内ばかりではない。広く次の十二カ国にも及んでいるのである。東西両ドイツ、オーストリア、ブラジル、イギリス、アメリカ合衆国、ハンガリー、イタリア、ポルトガル、チュニジア、ソビエト、そして日本。

すでにフランスの新聞『ル・モンド』は、本年一月から十月半ばまでの間に、九回にわたって、世界中で開催されたディドロ関係諸学会のニュースを、それぞれかなりの紙面をさいて掲載している。

新しい知の地平線開拓に大いに寄与

だが、二世紀も前のこの思想家が、今なお、なぜこれほどの現代性をもって問題にされるのだろうか。一七一三年生まれのディドロが、その知的活動を展開した十八世紀のうちにある（この十月、私はパリのユネスコでこの問題を中心とした発表を行った）。そして、このゆえにこそ、ディドロは、今なお新鮮な、生きた衝撃力をもって読者に迫ってくるのである。

だが、このディドロは、私たち日本人とは、もっと身近なつながりをもっている。それは彼が、二世紀以上も前にパリで刊行された『百科全書』のなかで、日本の実情を系統的に紹介し、かつ十八世紀フランスの哲学者と江戸時代日本の儒者との思想的類似性を最初に指摘した人物だったからである（この七月、パリ近郊のセーヴルで開かれた国際ディドロ学会で私はこのことについて話をした）。

後半は、実証科学的知識がヨーロッパに確立した時期であった。そしてディドロもまた、この新しい知の地平線の開拓に寄与したことは事実である。

しかし、彼の本質的な特徴は決してここにあるのではない。むしろ、あらゆる既成の価値秩序の転倒と、抑圧されていた価値の復権に向けられた彼の精神のうちにある。主人対召し使い、中心対周縁、正常対異常という価値序列を転倒し、召し使い、周縁、異常の復権をはかったその精神のうちにある（この十月、私はパリのユネスコでこの問題を中心とした発表を行った）。そして、このゆえにこそ、ディドロは、今なお新鮮な、生きた衝撃力をもって読者に迫ってくるのである。

だが、このディドロは、私たち日本人とは、もっと身近なつながりをもっている。それは彼が、二世紀以上も前にパリで刊行された『百科全書』のなかで、日本の実情を系統的に紹介し、かつ十八世紀フランスの哲学者と江戸時代日本の儒者との思想的類似性を最初に指摘した人物だったからである（この七月、パリ近郊のセーヴルで開かれた国際ディドロ学会で私はこのことについて話をした）。

仏哲学者と日本の儒者たちなど主題

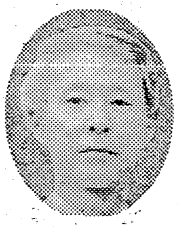
ディドロの今日的意味、ディドロとその仲間の哲学者たちと日本の儒者たち、ヨーロッパ十八世紀と日本の江戸時代。――もし今日、日本においてディドロを記念する学会を開催するとすれば、これ以上にふさわしい主題はないであろう。

今月の十九日から二十三日にかけて、京都大学がフランス外務省ならびに河合文化教育研究所後援をえて、京大会館で開催する国際シンポジウム「ディドロ、および十八世紀ヨーロッパと日本」は、まさに上記の課題を追求することを目的としたものである。

研究発表者としては、フランスから十三人、アフリカから一人、国内から十八人（うちフランス人四人）が予定されている。フランスから参加する第一級の研究者たちは、十八世紀研究の現役の最長老から最も若い世代までを覆っている。日本からの参加者は、フランス研究者、日本研究者、比較文学・文化研究者、美術史家、音楽史家、それに日仏比較料理研究家までを含んでいる。

かつてゲーテが「爆弾のように炸裂（さくれつ）」すると評したディドロのあの衝撃的精神が、日本の古い都でシンポジウムに参加する私たちすべてを「ゆさぶり、ゆり動かす」（ディドロのことば）その日に、私たちは期待を寄せよう。

（京都大学教授・フランス文学）



なかがわ・ひさやす
昭和六年東京都生まれ。京都大学文学部卒。名古屋大学教養部助教授、パリ第七大学客員教授などを経て京都大学文学部教授。専門はフランス文学。著書に『自伝の文学』『ディドロの「セネカ論」』などがある。

京都の国際シンポジウムのフランス側出席者と中川教授ら日本側学者による日仏シンポ「青年の現在　パリ―名古屋」が、二十五日午後一時から五時まで、名古屋市中区丸の内三、愛知県産業貿易館国際会議場で開かれる。聴講希望者は河合文化教育研究所（名古屋市千種区今池二、河合塾企画本部）まで。無料。